

---

# 歌うバカと乱世の英雄達

猫獅子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歌うバカと乱世の英雄達

### 【NZコード】

N8192V

### 【作者名】

猫獅子

### 【あらすじ】

路上ライブの帰りにトラックに轢かれそうな子供を助け……ずに見守っていると、何故か巻き込まれて死んでしまったバカな主人公彼はいくつかの力を貰つて恋姫の世界に転生することになった歌うバカは乱世でどのように生きていくのだろうか？

田原の…………（前書き）

設定を変えて再び投稿！

「マウストウ マウちゅううん」

なんて声が聞こえて目を覚ました  
え？マウス？ちゅー？てか口になんか引っ付いてる？？？  
か俺に跨がってね？

目線を少し下に落とすと金色の髪が目に映った  
キス？これキスですか？マイファーストキスですか？！  
はじめてーのちゅう…………よし次いつてみよう

クチュッ

「つ？！…ふあ、ちゅむ」

き、キターーー！なんか普通にべろちゅー受け入れられたんですけど  
？！

これもういいよな？大人の階段のぼっちゃつてもいいよなあ！！  
俺はキスしたまま金髪美女（顔見てねーけど）の胸に触れた

ペタッ…………？ペタペタ…………？？

小さい…………むしろない、つていうかなんか固いんだけど  
軽く、本当に軽く不安がよぎったがただのナイチチさんという結論  
を信じて次のステップに移ることにした  
胸を触っていた手をそのまま下に這わせて金髪美女？の股間を恐る  
恐る触った

ここに一つ捕捉をしておきたい

俺は今高三なんだが彼女なんてものはいたことがない  
作らなかつただけ！作れなかつたんじやなくて作らなかつただけな  
んだよ？ほ、ほんとだよ、ナンパ百連敗なんて記録は持つて……  
ああ持つてるよ！そのうち三十人に「ちょっと盛りすぎくて引くわ」  
つて言われたよ……あれ旦薬さしてないのに田が潤んできちやつた  
と、とにかく！俺は女と付き合つたことはねえし、女の体に触る機  
会もなかつた訳だ

長々としゃべつて何を言いたいかつづとだな、  
なんか触り慣れた物が付いてるんだけど（泣）  
しかもでけえテント立つてら（号泣）  
つてことはあれか？俺がさつきからキスしてべろちゅーして胸と股  
間まさぐつた相手はお、お、男……だつたつてわけか？  
ふ……ははつ……もつムリポ

「ウブツ」

あ、これ俺の声な？

「オボロロロロロロロオオオー！」

あ、これ俺の声口な？

「あやあああああ！」

あ、目の前になんかいるの忘れてた  
でも、もう何でもいいや  
ヤベ……もつかい吐きそ「おげええええ」なんか触り慣れた物が付い  
てるんだけど（泣）  
しかもでけえテント立つてら（号泣）

つてことはあれか？俺がさつきからキスしてべらぢゅーして胸と股  
間まさぐった相手はお、お、男……だったってわけか？  
ふ……ははっ……もつムリポ

「ウブシ」

あ、これ俺の声な？

「オボロロロロロロロオオオー！」

あ、これ俺の声口な？

「あやあああああ！」

あ、田の前になんかいるの忘れてた  
でも、もう何でもいいや  
ヤベ……もっかい吐きそ「おげえええ  
「いやあああ！ウボアツ！もつじめえええー！」

ちよつと吐き気が増しました

「もーひどいわねえ  
思いきり飲んじゃつたじゃない」

「ちよつと聞いてる?」

o r z

「あら? 放心してて全く反応しないわ  
わざわざまであんなに大胆だつたのに」

o r z

「今はそつとしど」うかしひ  
あたし向こうでライダージョネレーションやつてるから回復したら  
声かけてちょうどだい」

o r z

「ふむ……仮面ライダー?」

o r z (オーズ) !

「なんか今心なしか勢いが良かつたような?  
まあいいわ、じゃーね」

一時間後

o r z

一時間後

o r z

三時間後

Z  
Z  
Z

四時間後

62

五時から四時！

111

「それで会話しなうとするんぢやないわよ！ つていうかあんた一回完全に寝てたでしょ？ 一

「ちょっと何か語尾みたいになつてるわよ？」

難易度クライマックスまでクリアしちゃつたじゃない！シャウタが  
使いやすかつたわ！」「いい」か回復したんだからもど声かけなさいよ！

はるか何言つてんだよ

「一番強くなるにはバースに決まってるんだろ? 伊達さんなんめんなよー」「あんなオッサンより後藤くんのほうがいいわよ

「アアン？ オッサンって伊達さんのことか？！」

てめえこ、そ後藤の新しい服ひやんと見たのかよ、めいぢやくひやくひやふに  
てるじやねえか！」

「分かってないわね、あの悪ふつてる感じが可愛いんじやない

「おし、分かつたさつきのことでのぼる確信して  
加齢臭ムンムンのオッサンにはない魅力よ！」

だな？」

「ちょっと顔がいいからって調子に乗ってるんじゃないわよ？」

現実を教えてあげるわ、クソガキ」

「上等だ、ゲイ歴が長いだけのやつには負けねえよ？ なあゲテモノ？」

……

「うお？！ てめえさつきからダンシングショートを際どいタイミングでハメてきやがつて……でもこいつならどうよ？…」

「しまった！ 上手いことクロックアップのタイミングずらしたわねえ？！ そこからまだコンボがつながるの？！」

「ハツハー、まだまだいくぜえ！」

「いやあああー！ ま、負けたわ…」

「クククツ、これで二十勝十九敗だな？」

「くつ、まさかただの高校生がここまで強いとは思わなかつたわ」「てめえも変態のクセになかなかやるじやねえか、こんだけゲームで負けたのは久々だぜ」

「ハイ、ただいま変態と一緒にゲームでバトってます  
最初は拳での話し合いになりそうだったんだけど

「正直痛いのヤダ」つつたら変態も「あたしもー」とか言つて、  
じゃあゲームで決着つけることになつたのよ

ルールはクライマックスヒーローズで先に百勝したほうの勝利  
正直ゲームは得意なほうだからソックローで終わらせるつもりだった  
んだが、意外と相手もなかなかの使い手だった  
ちなみにさつき使つてたのは俺がキックホッパーで変態が電王な  
リュウタさんマジパネエっす

「つと……そういうやれ」

「スキあり……ん? どうしたの?」

「ねえよ……こや此処つてどこよ?」

だだつ広い白い空間にテレビとゲームと俺らしかいねえんだけど……

あと俺のゲロ

「え? いまさら? ってあ~あ負けやった」

「フフン、ダディがオンドウル王子に勝てるわけなかう」

「くつ! せめてダチヤアナザンにも必殺技があれば……」

はあ、少し休憩しない?」

「おー、俺も少し目が痛えわ」

「じゃあ休憩ついでにあたしの話でも聞いて貰えるかしり?」

「いいぜー、なんもしねえのも退屈だしな」

「それじゃ話すわね

あなた……実は死んでるのよ?」

……は?

「なにそれケンシロウの真似か?  
似てねえし台詞もちげえよ?」

「いやそうじゃなくてね?」

あなたは死んだのよ?

ドゥーコーアンダスタン?」

「質問! 何故にカタカナ?」

「そこに触れるな!」

作者の頭の残念さがバレるでしょうがー!」

頷かざるを得なかつた……

「え？俺死んでんの？」

「じゃあ今俺コーレイ的な感じか？！」

「まあそんな感じかしら

で、死んだ時のこと覚えてる？」

死んだ時、ねえ

えーと休日に路上ライブして、腹減ったからコンビニでパン買って歩きながら食つてたんだよ

で、ふと横見たらトラックに轢かれそうなガキがいたんだよな

「そして俺はそのガキを助けて死んじまつたわけか…」

「違うわよ

あんたはその子見ながらパン食い続けてたわ

「だって死にたくなかつたしい

てかそう簡単に命なんぞかけられつかよ

「それでそのあとなんだけど……子供を助けようとトラックを殴り飛ばした子がいてね

その子が飛ばしたトラックに潰されて死んじやつたのよ

「…………完全とぼっちりじゃね？」

「かトラック殴り飛ばしたの？どやつて？

「実はそのトラック殴り飛ばした子つてあたしが生き返らせた転生者だつたのよねー

あ、転生者つてじつてる？」

あれだろ？能力貰つてオリ主無双するやつだろ？

「はい正解」

その転生者があんたを殺したお詫びに転生させてやつて欲しいって  
言つてきてね、正直メンドカつたけど最近退屈だったし生き返らせて  
あげることにしたのよ」

「いやなんかもつ……最初つから最後まで俺の意思関係ねえじや  
ん」

俺にいつぺん話通せ  
ちやんと聞くよ?

「まあまあ、あんただつてやりたことむつとあつたでしょ?」

そりやまあ彼女とか彼女とか彼女とか

「…意外と欲がないわねあんた」

「まあ彼女のこと以外は結構満たされてたし  
「でもあなたつて孤児院の出身だつたんでしょ?」

家族のこととかお金のこととかかなり苦労したんじやないの?」

「よく知つてるなー

つつても親は初めからいたことねーからいまいち感覚わかんねえしよ  
孤児院の奴らは家族みたいなもんだし、友達は少ないつーかアレ  
だつたけど…

金は働きや問題なかつたしな、メンドイけど…

その上やりたいことはやつてきたしな、彼女いなかつた以外はなん  
の問題もねえだろ?

「へえ…なら5つ願いを叶えてあげるつて言われたら何を願うのか

しり？」

5つ…多いなあ…

「…………美味しいカレー食いてえ」

「…………はあ？！」

うお？！こきなり大声出されたらびっくりするだろが！

「え？ カレー？！ ワケわかんないんだけど…」

「いや美味しいじゃんカレー」

「美味しいけど、だからって…………ええー…………」

なんかめちゃくちゃびっくりされてるな

「ま、まあいいわ

2つ目は？」

「えーと、美味しい「食べ物以外にして貰えるかしら」ええー…………じ

や四次元ポケットとか便利そうだよな」

「秘密道具ね、どこでもドアなんかいいわよね」

「いやそうじゃなくてポケット単体のことだけ?？」

「あれ中身入ってないとただの入れ物じゃない?」

「いや何でも入るんだから便利だろ

楽器つて持ち歩くと重いしかさ張るしで結構大変なんだよ」

「そ、それだけ?」

「十分だろ?」

また信じられないって顔してんな

「み、3つ目も聞こえなかしぃ」

「う～ん、音楽で有名になりたいとか思わなかつたけどこいつで  
かいステージで思う存分歌つて見たかつたかな  
「何で有名になりたいって思わなかつたの？」

「色々めんどいわ」

「知れば知るほどあんたのことがよくわかんないわね……

ハイ4つ田ま？」

変態少し投げやりになつてね？

「…マクロスのシヒリルノームに一回会つてみてえかな  
憧れだし」

「会うだけなの？」

「あんたなら彼女にしたいつて言つと思つたんだけど」

「確かに彼女は死ぬほど欲しいけどな… そんなイカサマで惚れられ  
ても嬉しくねえんだよ

あんま馬鹿にすんなよ、変態？」

「ふーんじやあラストの願いを聞きましょうか

したい」と…あるにはある  
あるんだが、かなりハズいんだよ

「あー、うー、えーと…………か、仮面ライダーに変身してみたい  
「…………こきなり転生者らしげ願いが出て逆にびっくりしちやつた  
わ…………」

「」、高校生にもなつて仮面ライダーに変身したいとか……やべえ、  
超ハズいわ

やつぱやつぱのなしー。」

「う～ん、それ無理

めちゃ イイ笑顔じゃねーか、チクショー！

「あんたの願いは全部叶えてあげるわ」

「あ？叶えるってどうせって？」

「あんたを別の世界に飛ばせば多少の能力なんかは許容されるのよ  
ん？俺生き返れんのかよ？！」

「あらわしあり言つたわよね？」

「言つて……あれ？言つてたっけ？」

「頭残念なの？」

「それは作者だろーが！」

俺は多少物忘れが激しいだけだつつの

「ちなみにここに来て最初に何があつたか覚えてる？」

何つて…………

「オボロロロロロオーーー！」

「思い出すの時間がかかりすぎでしょ」

イカン……いやー一生忘れられんかもしれん

「とりあえず別世界だけど生き返らせてあげるからヤードマリ残したことがあればやつてきなさいーーー」

「俺で承した覚えねえんだけど……」

「何言つてんのよ、わつきしたじやない

「あーそうだつけ？」

確かにそんな気もするよつな

「…………ちよつと頭の具合心配になつてわがちつたわ

なんか言つてるけどスルー！

「てか別世界つて俺が住んでたこと似てんのか？」

「あんたが住んでた世界よりだいぶ昔だけど一応ゲームの世界だからある程度の常識は通用するとおもうわよ」

「おー、ゲームってなんのゲームなんだ？」

ゲームは結構プレイしてるからな、内容はほとんど覚えてねーけど

「真・恋姫十無双つていうゲームよ、ちなみにエロゲね」

「エロゲはやつたことねーなあ

全年齢版は少しあるけど

「下手すると簡単に死んじゃうからせいぜい頑張りなさいよ」

「大丈夫スルー &amp; ダッシュ」（見てみぬふりと逃走）がデフォだから

「主人公とは思えない台詞ね」

主人公って何？

「つとぼちぼち時間ね」

変態が呟くと同時に足元から俺の身体が消え始めた

「おー？！ガンツみてーだな」

「今あんたを向こうの世界に飛ばしてるとこさよ」

「ふーん、じゃあお前とはお別れか」

「あら？寂しいのかしら？」

「んなわけねーだろ！」

「あら残念ね

あとこれはあんたにあげた能力のリストと使い方よ

変態が差し出した紙を受けとつてポケットに突っ込んだ

「わつ わの願いつひせつこいつとかよ

まあ……サンキューな」

「あんたつてシンボレだったのね」

「つ、シンボレちやうわー！」

孤児院の奴らにもよく言われてたけど

「じゃあな最初以外は結構楽しかったぜ」

「あたしは最初が一番楽しかったけどねー！」

「てめえマジ変態だなー！」

「まああたしも結構楽しかったわよ

またあんたが死んだらさつきの続きをしましょ」

アツチじやねーよな? もうろんゲームのはつだよなー!

「あたしあらひちでもかまわないわよ」

「全身全霊でゲームの相手をしてやるぜーーーー！」

「 「 ..... 「」

「なあ?」

「どうしたの?」

「もうちょい転送早くなんね?

まだ腰あたりなんだけど……」

「うん、それ無理」

そのあと十分くらいたくせりながら転送されました

田代のめの（後書き）

ゴルゴルといえます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8192v/>

---

歌うバカと乱世の英雄達

2011年10月7日08時14分発行